ケイ素化学協会誌24号(2007)

伊藤嘉彦先生を偲んで

大阪大学名誉教授・科学技術振興機構　村井眞二

昨年2006年の暮れ、伊藤嘉彦京都大学名誉教授・同志社大学教授が突然の心臓疾病で急逝された。痛恨の極みである。伊藤先生のご研究には強い個性があった。教育にも人との接し方にも強い個性があった。影響を受けた人や研究は非常に多い。

畏友を偲び、伊藤さんと呼ばせて頂き、心に残る事を個人的な感慨をもって述べさせて頂く事をお許し頂きたい。

1960年秋、当時都島区にあった阪大工学部のグラウンドで、阪大堤研究室と京大小田研究室との恒例の野球試合があった。試合後の宴会に備え堤研４年生の私はおでんをつくる係りであった。小田チームの４年生として伊藤さんが参加していた。彼は野球のすきな友人を連れてきていた。伊藤さんの同級生で下宿の同室人の野依良治さんであった。みんなピッチャーをやりたがっていた。

やがてそれぞれ研究者としての道を歩みだす。当時は今のように繁々と研究交流の場があるわけではなく、学会と論文誌が主戦場であった。同じ世代の戦士達はまず仕事と名前を覚えるのが最初で、実際にその人と会い話しをするのはかなり後の事であった。現在のように各種集会でまず仲良くなり、あとからその人の仕事を知るという不健全さはなかった。戦場で手応えを感じた者達が仲間として集りだし、やがては将来の研究や研究体制を語るようになっていった。こうして生れ、後に６１クラブと名付けた、伊藤、野依、桑島、村橋、村井の５人会はうまい物を食う会でもあり、ある年、金沢の鷹の巣という小料理屋に集った。他の人や先輩に研究費を世話してもらっているようではいかん、自分達でつくろう。後にこの集いから４つの特別研究領域が生れたが、当時、我々は３０代後半の助教授で、野依さんだけが教授になっていた。

伊藤さんは京大高分子の研究室で緊張した助教授生活を送っていた。その頃、アルデヒド・イミンのケイ素バージョンをヒドロシランへの銅触媒によるイソニトリル挿入で合成した。それまでには全くない孤高というべき領域であった。また、環状ケトンをエノンに変換するのに、エノールシリルエーテルを経て酢酸パラジウムで酸化するという方法を考案した。今でも広く天然物合成に用いられている。私たちはこれに対抗して、エノールシリルエーテルにキノン系酸化剤DDQを反応させエノンを作る方法を提出した。ずっと後にメルク社が前立腺疾病薬アザステロイド合成の最終ステップで、多くの方法を試した後、採用したのは私たちの方法であった。あの緊張が続いていた助教授時代の伊藤さんの年賀状には「あほらしやの鐘が鳴るヵ」との添書があった。

熊田先生の後の研究を伊藤さんが担当することになった。ケイ素をトリガーとするオルトキノジメタンの新発生法とステロイド一発合成への展開は鮮烈な印象

をもたらした。ポリシランのケイ素ーケイ素結合へのイソニトリルの挿入反応の開発は、これまでに全くない新しい反応、これまでに全くない新しい物質の世界を開いたものである。伊藤さん自身が、いささかなりともケイ素化学に貢献でき、役目の一部を果たせたと思うと漏らしたことがあった。私はここまで来れば、これはもうキッピング賞ものだと思った。新しく教授になった１－２年の頃だったと思う、年賀状の添書に「兄チャン、ナニヤラスカーッとせんのや」とあった。

十数年前、伊藤さんと私の共通の友人、高麗大学の金始中教授が、韓国の内閣改造で突然、科学技術庁長官になった。早速二人でソウルへお祝いに出掛けた。ワイワイと楽しい会食の部屋の外には護衛の SP が何人かいた。期待の二次会もなしで、金大臣はスマンな、また今度と、片目をつぶって SP に拉致されて帰っていった。ソウルでは別の友人に、国境まで北へドライブして欲しいと頼んだことがあった。そこには予期した通りというか、案の定というか、道路がブツンと途切れて道路標識が「この先ケサンへ２３キロ、その先ピョンヤン」と指していた。撮った写真を後日伊藤さんに送ったところ「これはピュリッツァー賞モノやな」と返事がきた。

うまい物を食う６１クラブの面々が夫人同伴である年の暮、１２月２９日に京都東山の粟田山荘に集った。野依さんの文化勲章の祝いも兼ねたこの会の幹事は伊藤さんだった。集合場所は知恩院境内で、そこから１０分ほど歩くという仕掛であった。暮れなずむ東山の散歩は印象的であり、伊藤さんのまた新しい面を見た気がした。

伊藤さんはアルドールを、クロスで、不斉で、しかも触媒的にやってのけて世界を驚かせた。イソニトリルの不斉重合で、右巻きヘリックス、左巻きヘリックスを作りわけ、しかもこのヘリックスは少しの刺激でラセミ化する、つまり鎖の巻き方が反転する。独特の新境地を拓いた。定年後１年を京都薬大で、２年目からは同志社大でグループを持った。学会に再び伊藤名の発表が出てきた矢先の突然の不幸に言葉もない。定年前後の年賀状には「どんどん失速中ですヵ」と添え書きがあった。もう年賀状がこない。伊藤さん、お元気で。

合掌。

国境で途切れた道にはケサンへ 23km、その先ピョンヤンという標識。